

≡ 日本山岳写真協会創立85周年特別寄稿 ≡

戦後復興期の「JAPA」入会までの波乱記

『会に入るのが大変だった』

名誉会員・会員 No.40

中野 慶一

◎少年時代 海大好き人間に

国民皆泳で小学一年で学校のプールで覚えて、翌夏、お手伝いさんの実家・初島（熱海の沖）で透明で岩礁の海にあこがれ、海大好き少年になった。戦後、初島～熱海の遠泳大会が出来たが、中学生のため参加不可だった。

◎生きていれば、なんとかなるさ！！

大戦末期、三回の空爆(2月25日・3月9日・4月14日)で引っ越す先々で焼けだされ、命からがら知人を頼って奥多摩に引っ越す。荷物はほんの手荷物だけ。特に3月9日は外で見張っていたら、超低空で街を照明しながら空爆、機内の兵士も見えた。途端に焼夷弾がばらまかれ、4～5m先で爆発、びっくり慌てて家族を起こし、命からがら上野の山に逃げ込む。

◎戦中にとっては天国・牧場に引っ越す

父の知人が務める西村牧場の管理人事務所の一部屋に七人が三ヶ月暮らす。その間牛の世話、乳牛の世話、糞尿の掃除、乳牛の手入や乳搾り等、餌の燕麦の栽培等々、良く働いたものだ。ようやく工業学校に編入。学校の校庭は全てイモ畑になっていた。

◎工業学校と同時に学徒動員

動員先は昭和飛行機(西村牧場の親会社)で入隊草々グラマンなど敵機の爆撃やら機銃掃射で逃げ回る始末、情けないやら、これが戦争かと嘆いたところで終戦、夏休み中で9月から学校に戻る。

水彩画に目覚め、美術部長になってからも色々な賞を取り、いずれ芸大に入りたいと云った所、美術教師からお前の技術では何回受けても通らないから辞めとけと云われ、写真部と山岳部の門をたたく。

山岳部外部顧問・毎日新聞山男の第一人者・特信部の牧野誠さん(後に写真部長)にしごかれ海男が山男に変身、思った以上に体力があった。

◎山映商会の門をたたく(昭和24年)

通いなれた銀座、並木通りの山映商会の風見武秀さんを紹介され、山岳写真協会を知る。どうしたら入会できるのか聞いた所、実績のある作家であることと言われ、学生は無理だと言われた。山映商会は毎日新聞の山好き記者のたまり場で、運動部長の竹節作太さんやマナスの映画を撮った依田さんにも紹介され、谷川岳の話をしたら、手伝ってほしいと言われる。夏山登山のグラフを作りたいと喜んで話を聞くと一ノ倉沢の東尾根を出合から頂上までのストーリー写真を撮りたいと言われ



昨年の写真展祝賀会で乾盃音頭を取る中野慶一氏

晴天の中、気持ちよく頂上を目指した。結果は毎日グラフや新聞に校名・氏名も掲載され学校に報告したら理事長以下皆さん大喜びでした。

◎高校3年の後半は冬山三昧

①厳冬期の鹿島槍ヶ岳 高校生初登坂

年末ぎりぎりに大町から雪路を歩いて東尾根の麓、鹿島部落の炭焼き小屋をベースキャンプとしてスタート、二日後体力のあるT君をアタック隊として早朝東尾根に取り付き、途中雪洞で休息を取らせ乍、山頂を目指す。吹雪も治まり、また関西大学生にも助けられたようだが、無事登頂バンザイ！ 数日後、スポーツ新聞に掲載された。BCにいる我々は山の写真は撮れず。

②日光 雲竜峡の氷壁に挑む

取材を兼ねた山行で、取材陣とは別の場所からT君の大氷壁登坂を狙ったのが的中、後に日本観光写真コンクールで特選になり、翌年の国鉄カレンダーの二月号採用された。但しモノクロ写真を沈着でカラー印刷されたが氷が表現されず残念なり！

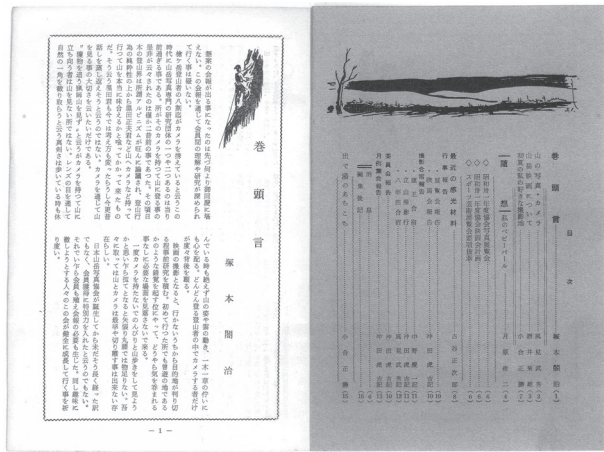
③厳冬期の富士山観測所の取材に同行

吉田駅から五合目まで雪中行軍、一泊してから大沢に出て見上げるような頂上を目指し、二人アンザイレンしながら一步一步氷の急斜面を登る。事前にアイゼンの刃を磨いてきたが、体重45kgでは刃先2～3ミリ程しか食い込まず若さにまかせて頂上に到着。仮小屋のような観測所に潜り込む。牧野さんは早速取材開始、さすがぶん屋(新聞記者)のプロだ。(コロナ観測所の出来る前)カメラ

を首にかけ外へ四方白銀の世界、影もなく写欲も浮かばず数枚撮って小屋に戻る。途端にカメラは氷の塊になりびっくり、所員に笑われ金属類はそうなるから要注意と言われた。所員と同じ部屋で泊まったが・・・大部屋の中央にコタツがあり円形になって足を突っ込む。朝、目が覚めてびっくり、髪の毛から顔の周りの毛布が霜だらけ、三泊とも同じだった。いよいよ下山となり大沢直下を見ると、氷の逆落し、一人が滑るれば二人ともお陀仏、アンザイレンなし自分の命は自分で守れと、風で飛ばされない様に耳を澄まし一步一步、歩き続けた。若さゆえか、さほど怖がらずなんとか五合目まで下山、ほっと一息、ずり足でそのまま吉田まで下る。今思えば怖さ知らずの山行であった。また牧野さんは中学新聞の連載で記事になっていた。なお私自身は観測所の大変さと厳冬の沢の登降のすざましさを、身を持って感じたところです。

◎昭和 25 年 写真短期大学に入学

入学早々先輩と山岳部、観光写真部を立ち上げ交通公社の事業を手伝う（アルバイト）。公社（JTB）の先輩から呼びだされ、正式な仕事をするためには、契約書が必要と部と交わす。早速「トラベルフォトニュース」の題材を探していた所なのでこんな題材でどうか「新雪の北アルプスに挑む」・・・観光写真でなく山岳部としても魅力のある題材、その場で引き受ける。山岳部の大橋部長と相談の結果二人では無理と部長の友人、東大山岳部長の米田さんと後輩二名の計三名の応援隊で計五名のチームでプランを立てる。穂高連峰に数回登っている牧野さんに聞いた所、槍ヶ岳をバックに北穂高二尾根あたりのカットが良いだろうと有力な情報をもらい、撮影箇所のプランが出来上がる。出発にあたり交通費・食料費・実費・フィルム支給され、大学には十日間の休講を届けて11月3日の大重量のザックを背負って五人で新宿を立ち、翌朝、大糸線ひとかいちば下車、大滝小屋を目指してスタート。なお東大組は常念岳を経由して大滝小屋で合流する予定。小倉の部落を越えて日没前に平坦な登山道に落ち葉を集め二人用のシュラフに潜り込む。なお足元は自家製の草鞋だった。早朝雨が降り出し寝床は撤収、早々に鍋冠山を目指す。途中松本の深志高校山岳部のメンバーに会いバテ気味な我々を見て荷を少し持ちましよう、機材や燃料など大滝小屋まで運んでもらい大助かり、リーダー格の佐々木君、後日エベレストに登頂、平成になって戸隠小屋を立ち上げた一生山男のようだ。大雨の中五日、大滝小屋に到着、食料分担で運ぶ東大組に大雨に阻まれて到着せず我ら二人は非常食のアルファ米と味噌でその場をしのぐ。昨日大雨の中、東大組三人が到着。その夜は白米に肉の缶詰のご馳走にあり付く。カンロカンロ。7日早朝雲一点もなく快



A5判の協会会報創刊号、風見武秀氏、中野慶一氏の記事が掲載されている。

晴、パノラマ写真を撮るため大滝山 2616m に登り雄大な槍穂高を撮り、主目的地北穂を目指し徳沢園に下り涸沢小屋に到着。その夜寝つけず、早朝外に出るとモルゲンロートの穂高連峰を見て山男の幸せを感じた。東大組の一人は所用のため下山、余分な食料荷物は小屋に預け四人揃ってアイゼンを付け北穂の東稜を登る。途中米田さんがシガータイムと言ってパイプを取り出しプカプカリ・・・さまになっており一枚撮る。タバコを吸わぬ小生には理解できず。北穂小屋到着、早速二尾根近くを偵察。翌朝撮影準備を整え二尾根途中まで下り、東大さんがモデルになり槍ヶ岳をバックに撮影スタート、最高のカットが撮れたので早々に引き揚げ、下山準備。今思えば自分の写真を撮らない事、後の祭りだ。昼食後山頂直下北沢をグリセード下り、小屋に預けた荷を背負い横尾山荘に到着、東大組は徳本峠越え、我々は車を探したがなく、材木の上になら乗せると言われなんとかなるさとお願ひしたがいざ材木の上へばりついたが、寒い事、振り落とされないか、今山行一番の恐怖だった。松本で東大組と合流、信州大学山岳部の部屋に泊めてもらい（東大との交流あり）翌朝九日間のアカ落しに浅間温泉で打ち上げを祝う。部長には山行録を書いてもらい翌日 JTB 担当者波多野さんに、フィルム共々提出しました。12月1日付のトラベルフォトニュースが発行され全国の国鉄駅に提示された。

◎朋文堂との出会い

戦前から住み慣れていた神田岩本町のすぐそばに朋文堂社屋がある事を知り訪ねた所すぐ山仲間として受けいられ実績を話すと一週間後、森いずみ編集長より呼び出され月刊誌「山」の口絵に使いたいの提出して欲しいと云われた。口絵のほか記事、おこがましくも「冬山写真の撮り方」など、その後紀行文なども書く。新島社長から来年涸沢にヒュッテを作りたいので手伝ってくれと言われ新し物好きで期待をこめてOKを出す。(つづく)